Column
調査の
達人

ウィリアム・フット・ホワイト

観察者と被観察者の協働をめざして

有里典三
創価大学通信教育部 教授

ホワイト（1914－2000）の主著『ストリート・コーナー・ソサエティ』（*Street Corner Society,* 1943）は，ハーヴァード大学の特別研究員だった23歳のホワイトが，3年半にわたる参与観察によって厖大なフィールドノーツを作成し，これをもとに完成させた都市エスノグラフィーの傑作である。ホワイトは，1943年にこの研究でシカゴ大学から博士の学位を取得した。

調査地となったのは，コーナーヴィル（実際の地名はノース・エンド）とよばれるイタリア系移民のスラムである。1937年当時，そこはボストン市内にあって貧困と犯罪の温床とみなされていた。外部の中産階級の人びとにとっては，規律のない「社会的解体地域」であった。彼らにとっては，あたかも国境を越えた異郷にほかならなかった。

しかし，ホワイトは調査にあたり，外部社会特有の既成知によって，「社会解体の場」という裁断は下していない。一貫して，コーナーヴィル内部のコスモロジーの解明に焦点を当てている。

調査の最大の特徴は，現地に直接住み込み，街かどにたむろするコーナー・ボーイたちと同じ日常パターンを体験しながら，探索的に調査を進めたことだ。そして，微妙な人間関係をふくむ生活世界の事実面を，参与観察者の役割を演じながら状況に即して観察，記録した。スラムで継続するできごとを先入観にとらわれずに調査することで，生活世界に根ざす固有の意味を深く洞察することが可能になった。

このような「究極の参与観察」を実体験することによって，ホワイトはスラムにも独自の行動規範と社会組織が存在することを発見する。この結果は，スラムは社会的解体地域だと主張するL・ワースらシカゴ学派の都市理論に修正を迫る1つの契機となった（「スラムの社会組織」，1943を参照）。

ところで，このコーナーヴィル調査は，ホワイトのその後の産業組織の研究やラテンアメリカでの農業調査，農業開発研究の原型となっている。そこには，どんな研究上の思想・原則が織り込まれていたのか。

まず，研究上の力点は，集団のなかでの個人の地位や階層関係が決定されるメカニズムを解明することにあった。こうしたホワイトの人間関係論的アプローチの背景には，当時ハーヴァードの新潮流をかたちづくっていたヒューマン・インタラクション理論が色濃く宿っている。

次に，質的調査と量的調査を融合しようとする問題意識である。ホワイトは，たんなる「理解」を超えて「科学的」結論に達するために，人間行動の主観的側面ではなく，個人間の相互作用の頻度に注目して人間行動そのものを直接測定すべきだと主張した。「相互作用を調べるための概念図式」を利用して，1つのケーススタディから普遍的な結論を導き出せることを実証してみせた。たとえば，個人のリーダーシップを集団や組織の変化と結びつけて分析し，ドックというリーダーが率いるノートン団内部の個人の地位や階層関係と，ボウリングの成績やノイローゼ症状との関連を発見している。

さらに，ホワイトは社会問題や市民生活の改善のために，社会学はどんな貢献ができるのかをつねに問題にしていた。そして，そのまなざしは社会的弱者に向けられていた。ホワイトのコミュニティ・スタディが，表通りのコミュニティ・ライフとは区別される裏通りのストリート・ライフを解明しているのは，その現れである。

そして，彼はつねに観察者と被観察者との協働を考えていた。ホワイトが経験し思想化した臨床の知が契機となり，その後，両者が協働して進める「参与的行為調査」（PAR: Participatory Action Research）という応用社会調査が提案されたのである。

Column
調査の
達人

奥田道大

モノグラフのなかに都市社会の理論を求めて

広田康生
専修大学人間科学部 教授

都市社会学者としての奥田道大が切り拓いた研究領域は都市コミュニティ論を軸に，都市エスニシティ論，都市的世界論，初期シカゴ学派モノグラフの研究，そして同研究を基礎にしたフィールドワークの方法論と多彩である。「調査の達人」というなら奥田は，フィールドのなかの些細な現象から社会的意味や理論を発見する達人であった。

奥田の調査研究は，日常生活の「秩序」と全体社会の制度的秩序とが切り結ぶまさにそのなかで，「下からの秩序」形成を基軸にしながらも，つねに第三の方向性とそれを担う新たな住民主体の出現に焦点を当てた。

『都市コミュニティの理論』では，「町内会体制」に代わる新たな地域秩序の出現を大都市郊外の「住民運動」のなかに探り，『池袋のアジア系外国人』から『都市コミュニティの磁場』への一連の研究では，グローバル化が産み出す「移動」のなかでの人びとの生き方を見つめ，「下からの都市論」構想に到達した。奥田の「都市コミュニティ」概念は，人びとの生き方や「秩序」形成を探るための，フィールドから得た戦略的な概念であった。

奥田のコミュニティ概念は，「さまざまな意味での異質・多様性を認め合って，相互に折り合いながらともに自覚的，意思的に築く洗練された新しい共同生活の規範，様式」あるいは「生き方の知恵，戦略として，微妙な距離感と境界を内在させながら住み合う実態」として定義されるが，それは，あくまでも都市的世界における絶えざる問題領域の出現，構造変化の予兆にふれ，みずからをつねに新しい状況にむけて脱構築する人びとの生き方とその社会的意味を捉える概念用具であった。

このような問題意識と調査体験を背景に，都市社会の調査研究者としての奥田道大が希求し続けたテーマは，フィールドに一瞬姿を現す現象やその予兆をも捉える「事例調査」あるいは「モノグラフ」に内在する「理論」をどのように表現できるかということであった。奥田はそのエネルギーの多くをR・フェアリス『シカゴ・ソシオロジー』，N・アンダーソン『ホーボー』，N・ハイナー『ホテル・ライフ』，H・ゾーボー『ゴールドコーストとスラム』，H・ガンズ『都市の村人たち』，I・アンダーソン『ストリート・ワイズ』などのシカゴ学派系モノグラフの翻訳，出版のために費やした。それはフィールドから紡ぎだされる理論，方法論とは何かを追求する長い試みでもあった。

もしも理論が社会に関する洗練された仮説だとするなら，フィールドワークの積み重ねが凝縮された事例研究でそれを表現することは可能か。奥田が事例調査，エスノグラフィック編集に求め続けたこの問いは，W・F・ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』の再訳に象徴される。奥田は，自著『ホワイト「ストリート・コーナー・ソサエティ」を読む』のなかで，ホワイトがポスト構造主義人類学からの批判のなかでも，みずからのフィールドに寄り添いつつ，「一つの事例で全体を見通す」理論提出の可能性を追究したことに共感した。奥田にとって，モノグラフそれ自体が理論だった。

大学退職後に奥田道大が主催した研究会は異彩を放っていた。奥田は研究者たちや院生たちのフィールドからの発想や問題提起に耳を傾け，ときに毒気のある，しかしウィットに満ちた議論を投げかけ，都市社会学のアイデンティティを追求し続けた。R・パークはそれとは気づかぬかたちで研究者たちにアイディアを喚起したというが，奥田もまたそうした意味で都市社会学的調査研究を指導した達人であった。